金武町

金武鍾乳洞遺跡

金武町字金武

26° 27′ 18.67″ N
127° 55′ 22.62″ E

用語解説

●金武観音寺
1522年に日秀上人が建てたと伝えられる寺。「金武の寺」と呼ばれている。

●鍋形土器
鍋の形をした土器。

●カムィヤキ
奄美諸島に属する徳之島伊仙町の山中に分布するカムィヤキ古窯跡群で、11～13世紀に生産された無釉の焼締の陶器。鹿児島県の薩摩半島から琉球列島全域に分布する。

●白磁
白磁の素地に透明釉をかけ、高温で焼成した磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本のほか、ヨーロッパでも生産される。沖縄で出土する中国産白磁は、稀に定窯産もあるが、大部分は明代の景徳鎮や中国南部を産地とする。

●青磁
釉薬が緑か青色系の色調となる磁器。古くから中国をはじめ、朝鮮、日本、ベトナム、タイ、ミャンマーなどで生産されている。日本や沖縄で出土する中国産青磁の多くは、元から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で生産されたもの。

●背甲板
亀の背中にある甲羅。

●板斧状製品
刃の部分が平らで広い形をした製品。

●滑石製石鍋
長崎県西彼杵半島一帯に産する滑石を加工して作った鍋。煮炊きを目的とし保温性に優れる。

●炉跡
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。

分布調査の様子

金武鍾乳洞遺跡は、字金武後村渠に所在する洞穴遺跡です。金武観音寺の境内と金武公会堂裏の2カ所にある開口部から洞内に入ることができます。遺跡は公会堂裏側の開口部近くにあり、1957（昭和32）年に多和田眞淳氏により発見されました。本遺跡がある石灰岩丘陵（標高約70m）は金武集落一帯を遠望できる場所で、その上には町内で唯一のグスク（金武グスク）も所在します。

1988～89（昭和63～平成元）年度の町内遺跡詳細分布調査では、沖縄島内で作られた鍋形土器、徳之島産カムィヤキ、中国産白磁・青磁等島外から持ち込まれた食器類、ウミガメ骨製品（背甲板を利用した板斧状製品）や貝・獣骨など、グスク時代初期の遺物が採集されています。

その後、2017（平成29）年度からは、沖縄国際大学により発掘調査が行われ、グスク時代の土器や中国産陶磁器、滑石製石鍋、鉄製品などの遺物が出土した他、炉跡の可能性がある痕跡も確認され、遺跡が良好な状態で残されていることがわかりました。

人々が海岸近くから内陸部に進出し始めたグスク時代の初期に、この場所がどのように利用されていたか、今後の調査研究の成果が期待されます。

発掘調査の様子

沖縄国際大学の学生さんが発掘調査をしたんだね。

2018年の調査では、グスク時代よりも古い層から、中国の古銭や砥石（といし）、人骨片などが出土したのだよ。

グスク時代初期の洞穴の利用がわかる遺跡

出土遺物

【参考文献】
・多和田眞淳. 1960.「琉球列島の貝塚分布と編年の概念 補遺」. *In*：琉球政府文化財保護委員会（編）.『文化財要覧』.
・金武町教育委員会編. 1990.『金武町の遺跡』.
・沖縄国際大学考古学研究室編. 2018.『金武鍾乳洞遺跡発掘調査概報(1)』.

【画像提供】金武町教育委員会

金武町

奥首の交通遺跡群

金武町字金武

26° 27′ 51.42″ N
127° 55′ 58.04″ E

用語解説

●宿道
首里と各地の間切を結ぶ幹線道路。王府からの情報は、宿道を通って中頭・国頭・島尻に伝えられた。

●国頭方東海道
沖縄島の東岸を通り北部と中部をつなぐ道。中部で中頭方東海道と連結し首里に至るルート。

●上杉茂憲県令
1844年生まれ、1919年没。米沢藩の13代藩主。1881（明治14）年から1883（明治16）年まで第2代沖縄県令を務めた。沖縄の実状を知るために、県内のほとんどの地域を視察した。その記録を『上杉県令巡回日誌』として著している。

●峻坂羊腸
険しい坂が、羊の腸のように幾重にも曲がりくねっている様子。

●遺構再現整備
測量座標や図面等の発掘調査記録を基に、遺構を再現する形で整備したもの。

発掘調査風景

町の東側を流れる億首川の中程、川幅が狭まった石灰岩丘陵にある、近世から近代にかけての交通遺跡群です。最も古い遺構としては、首里王府が整備した近世の幹線道である「宿道跡」（国頭方東海道の一部）が確認されています。億首ダム建設事業に伴う発掘調査では、明治時代に当地を訪れた上杉茂憲県令（現在の知事に相当）の日記に「螺旋シテ下ル」「峻坂羊腸」と描写された宿道の姿が確認されました。

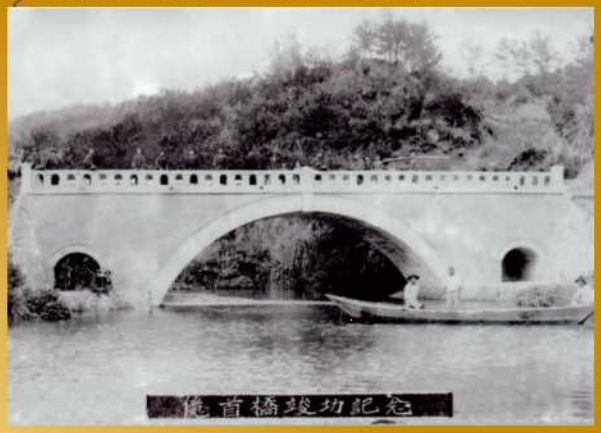
宿道が通る億首川の右岸にある丘の下方には、大正時代の村道跡、左岸には1931（昭和6）年に造られ、沖縄戦で破壊されたアーチ橋（旧億首橋）の跡があります。奥首（ウククビ）の古地名をもつ限られた範囲に、近世～戦後のいくつもの時代の主要道路が隣接していることが特徴です。

ダム周辺整備のため使われた宿道の石材や岩盤については、近年元の場所に戻す遺構再現整備が行われ、現地保存された村道跡の一部や旧億首橋とともに歴史散策できる場所となっています。

【参考文献】
・金武町教育委員会. 2011.
『奥首の交通遺跡群 億首川流域古墓群比嘉原地区 幸地原の炭焼窯跡』.

遺構検出状況

旧億首橋（爆破前）「並里区事務所提供」



河床内残骸確認調査

奥首に残る近世～戦後の主要道路

旧億首橋のある場所は、億首川上流の山から切り出された材木が集められたところなのだ。その材木は、舟に乗せて中南部へ運ばれていったのだよ。水上交通と陸上交通が交わる場所でもあったのだね。

旧億首橋現況

【画像提供】金武町教育委員会

恩納村

塩屋貝塚（しおやかいづか）

恩納村字真栄田塩屋

26° 26′ 11.43″ N
127° 45′ 54.01″ E

用語解説

●砂丘地
海岸の砂が吹きあげられてできた丘。

●爪形文土器
外表面のほぼ全面に、人の爪や指先で施したような文様、あるいはそれを模した文様が見られる深鉢形の土器。沖縄県では縄文時代早期に属しており、その分布は沖縄島と渡嘉敷島、奄美諸島に限られている。

●弥生土器
弥生時代に焼かれた土器。焼成温度は縄文土器よりも高いため、赤色で、薄手だがしっかりしている。文様の無い土器が多く、口広の壺（つぼ）や、高坏（たかつき）・甕（かめ）・鉢（はち）等がある。

発掘調査風景

発掘調査風景

貝塚出土の大型貝類

塩屋貝塚は、垂川河口周辺の海岸砂丘地にあります。弥生～平安並行時代Ⅰ～Ⅱ期（約2300～2000年前）を中心とする遺跡ですが、下層からは約6000年前の「爪形文土器」や縄文時代後期から晩期にかけての沖縄産の土器もわずかに出土しています。量的に多いのは九州等から持ち込まれた「弥生土器」ですが、同じ地層からは地元産の土器群、腕輪等の貝製品や石器、さらに大量のヤコウガイやゴホウラ、サラサバテイ等の貝類が出土しています。塩屋貝塚は九州等との交流を「モノ」から明らかにする事ができる可能性のある重要な遺跡です。

発掘調査区全景

貝類出土状況

沖縄県内で初めて九州の弥生土器が発掘された貝塚

弥生土器等遺物

弥生土器

【参考文献】
・恩納村教育委員会. 2012.『恩納村内遺跡詳細分布調査報告書』.
・崎原恒寿. 2011.『第8章 塩屋貝塚発掘調査概報』. *In*:
恩納村博物館(編)『恩納村の文化のかおり:新収蔵品展』.

【画像提供】恩納村教育委員会

恩納村

熱田貝塚

恩納村字安富祖

26° 30′ 42.38″ N
127° 53′ 58.59″ E

用語解説

●平地式住居跡
竪穴住居のように地面を掘り込まず、平地に柱を立てて構築した住居の跡。

●炉跡
火を使って調理等をした跡。住居の外にある場合もある。

●くびれ平底土器
古墳～平安並行時代の土器で、アカジャンガー式土器とフェンサ下層式の二形式がある。いずれの土器も沖縄島及び周辺離島、奄美諸島に分布する。深鉢形で底部は台状を呈する。

●グスク土器
グスク時代に沖縄で作られた土器。鉢・鍋・壺を主体とした底部が広い土器で、カムィヤキや滑石製石鍋を模して作ったと考えられる。

●滑石製石鍋
長崎県西彼杵半島一帯に産する滑石を加工して作った鍋。煮炊きを目的とし保温性に優れる。

●カムィヤキ
奄美諸島に属する徳之島伊仙町の山中に分布するカムィヤキ古窯跡群で、11～13世紀に生産された無釉の焼締の陶器。鹿児島県の薩摩半島から琉球列島全域に分布する。

●広田遺跡
種子島の南種子島町にある、海岸砂丘上につくられた弥生時代中期～後期（約2200～約1700年前）の集団墓地。

●貝符
貝を板状に加工し、文様が施されたもの。装身具として利用されたと考えられる。

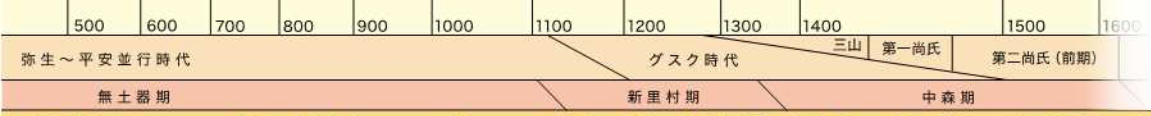
発掘調査風景

熱田貝塚は、安富祖熱田の海岸砂丘地に位置する弥生～平安並行時代Ⅲ～Ⅳ期（約2000～900年前）からグスク時代（約900～400年前）の遺跡です。遺構として、グスク時代の柱穴が約70基あり、4～6m四方の平地式住居跡が5棟確認されました。そのうち1棟からは炉跡が見つかっています。

出土遺物は、弥生～平安並行時代の無文くびれ平底を主体とした土器群と、グスク時代初期の「グスク土器」や九州からもたらされた滑石製石鍋、鹿児島県徳之島で生産されたカムィヤキなどで、12世紀における九州と沖縄産のモノの共伴関係（何と何が同時に使われていたか）がわかった遺跡です。また、くびれ平底土器群の時代からグスク時代へ移行する過程を示す遺跡としても重要です。出土した貝製品の中には、種子島にある広田遺跡の広田上層タイプの貝符も含まれており、沖縄県内では最初の出土例となっています。

無文くびれ平底土器（底部）

【参考文献】
・高宮廣衛. 1969.「恩納村熱田貝塚調査概報」. 沖大論叢 9: 323-365.
・沖縄県教育委員会編. 1979.『恩納村熱田貝塚発掘調査報告書』.



柱穴

弥生～平安並行時代からグスク時代への移り変わりを示す遺跡

カムィヤキ

貝錘一括出土状況

【画像提供】沖縄県立埋蔵文化財センター

伊是名村

具志川島遺跡群

伊是名村具志川島

26° 58′ 34.3″ N
127° 56′ 57.37″ E

用語解説

●崖葬墓
崖の中腹にある岩陰を利用した墓地。

●風葬
死体を地中に埋めずに樹上や地上にさらし、自然に白骨化させる葬法。

●再葬
一旦葬った人骨を別の場所に改めて葬ること。

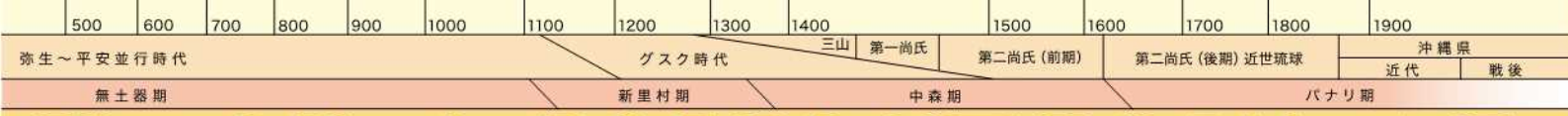
具志川島（伊是名村教育委員会提供）

具志川島は沖縄島の北西洋上、伊是名島と伊平屋島の間に位置する無人島です。島の周囲は約4.2km、南北0.4km、東西1.9kmと細長い形をしており、標高は最も高い場所で28mしかありません。

このような小さな島ですが、縄文時代から弥生～平安並行時代を経て、グスク時代、近世・近代まで様々な時代の遺跡が17ヶ所も確認されており、「具志川島遺跡群」と名付けられています。島は少なくとも、約4800年前には利用が開始され、伊是名小学校具志川島分校が廃校となった1970（昭和45）年まで長期間にわたり人が断続的に生活していました。

縄文時代後期には、人々は台地に住み、岩陰を墓（崖葬墓）としていたようです。岩立遺跡、岩立遺跡西区の岩陰からは90体を超える縄文人骨が確認されましたが、遺体の葬り方は風葬が主体だったと考えられています。また、県内で初めてとなる貝製腕輪を身につけた人骨や、丁寧に並べ直して再葬された人骨が見つかり注目されました。なお、腕輪の材料はオオベッコウガサという貝でした。

【参考文献】
・沖縄県立埋蔵文化財センター. 2012.
『具志川島遺跡群：保存・活用のための発掘調査報告』.



崖葬墓検出状況（岩立遺跡西区／縄文時代後期）

貝製腕輪を身につけた人骨（岩立遺跡／縄文時代後期）

沖縄県内初となる貝製腕輪を身につけた人骨を発見

岩陰の堆積状況（岩立遺跡西区）

人骨と共に発見された装飾的な貝製品（岩立遺跡西区／縄文時代後期）

【画像提供】沖縄県立埋蔵文化財センター